

サーブレシーブの質が攻撃に及ぼす影響

中村あすか (長崎大学)

1. 目的

本研究の目的は、サーブレシーブの質と攻撃との関係性およびアタッカー自身がサーブレシーブをした場合のサーブレシーブの質と攻撃との関係性を明らかにすることである。

2. 研究方法

- 1) 分析対象：令和4年度九州大学春季・秋季バレーボール女子1部リーグファイナルラウンド上位パート（合計12試合46セット）
- 2) データ収集および分析方法：九州大学バレーボール連盟によって配信されたアーカイブ動画を視聴し、私案のデータ用紙を作成してデータ収集を行った。統計的な有意差検定は分散分析を用いて有意水準は5%とした。
- 3) 分析項目：サーブレシーブの質（Aパス、Bパス、Cパス、Dパス）、サーブレシーブからの攻撃結果（決定率、失点率、効果率）、サーブレシーブ対象者による攻撃結果（決定率、失点率、効果率）の3項目とする。

3. 結果と考察

サーブレシーブからの攻撃結果について、春季は、AパスとCパス、AパスとDパス、BパスとCパスの決定率間に有意差が認められた（図1）。よって、AパスおよびBパスの割合を増やし、Cパス・Dパスを減らすことで全体の決定率を上げることができることが明らかになった。

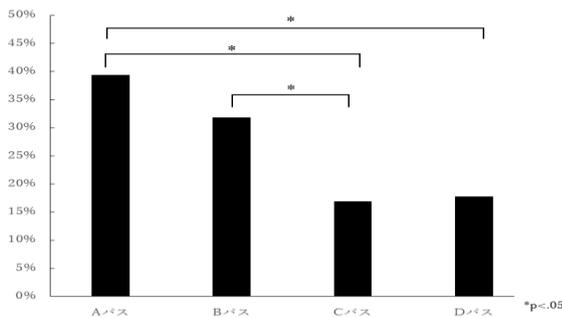


図1 サーブレシーブの質とアタック決定率の関係（春季）

秋季は、いずれのパスの組み合わせの決定率間にも有意差は認められず、各チーム春季から秋季にかけてハイセット攻撃の練習に力を入れており、その成果が表れたのではないかと推測される。また、春季・秋季ともにセッターが無理にハイセットを行うよりもその他のプレイヤーが安定したハイセットを行う方が良い場合があることが明らかになった。よって、セッター以外のプレイヤーによるハイセットの練習や、それを得点に繋げるための攻撃練習をすることがチーム全体の決定率を上げるために有効であると考えられる。

次に、サーブレシーブ対象者による攻撃結果は、春季・秋季ともに優勝しているK大学は他大学と比較した際にサーブレシーブ対象者による攻撃本数が多く、決定率および効果率が高かった。よって、サーブレシーブ対象者による攻撃を積極的に活用し、効果率を上げることで試合に勝つ可能性が上がるのではないかと推測される。また、春季と秋季の結果を比較すると、どの大学も効果率が上がっていたことから、秋季はサーブレシーブ対象者が体勢を崩すことなく攻撃に入り、安定してアタックを打つことができていると推測される。

4. 結論

本研究では、Aパス、Bパスの割合を増やし、C・Dパスを減らすことで攻撃全体の決定率を上げることができること、セッターが無理にハイセットを行うよりも、その他のプレイヤーがハイセットを行う方が良い場合があること、サーブレシーブ対象者による攻撃を積極的に活用することで勝利に繋がる可能性があることが明らかになった。

5. 主な参考文献

秋山央 他5名, バレーボールのサーブレシーブからの攻撃における勝敗に関連する技術項目-大学男子トップレベルを対象として-. バレーボール研究, 18(1), 2016.